

銅賞

前に進むためには

横須賀市立大津中学校三年

鈴木零生

「アイヌ民族なんて、いまはもういない。」

私はこの言葉に疑問を抱いた。

この発言はある議員が先日、ネット上に書き込んだものだ。私はこの報道をテレビで知った。なぜ私がこの言葉に疑問を抱いたのか、それは私が小学五年生の夏、家族で北海道旅行に行ったときに、「登別クマ牧場」を訪ずれた際、その施設内に「ユーカラの里」という、明治初期のアイヌの生活を忠実に再現した村があった。そこでは、実際のアイヌ民族の方々がアイヌ民族舞踊を披露していた。私は実際に見たのに、なぜ「いない」などと言うのか。気になったのでインターネットで調べてみたところ、議員は誤解を与えるような表現があったかもしれない、と説明していたが、やはりアイヌ民族を批判するような意見もしていた。すると私の母が、

「アイヌの人は昔から差別を受けているんだよ。」と静かに言った。

私はこれを機にアイヌ民族の歴史や差別問題をもっと調べようと思

い、「アイヌ民族について」と検索した。

アイヌ民族は約17世紀〜19世紀に、東北地方北部から北海道（蝦夷地）、樺太など、広範囲に先住していた。しかし、日本政府は「蝦夷地」を「北海道」に名を変え、日本の領土にしてしまった。

明治時代からは「北海道旧土人保護法」という法律が発表された。それは、アイヌの人が慣れない土地で窮屈な思いや、不利な立場に立ってしまうことがあったので、アイヌの人を教育したり、土地を与え「保護する」という意味で作られたのだった。私は、アイヌの人の気持ちを考えられている良い法律だと思った。しかし、下にある文を読み、考えは一変した。その政策は、結果的に日本人への「同化政策」として、日本語や日本文化を押し付ける一方、アイヌの言葉や文化は学校などで教えられることなく、勢力を弱まらせ、農業をさせることで開拓農民として扱われることとなってしまった。よって日本人からすればアイヌ民族は「知力が低い」、アイヌの習慣である耳輪や、刺青などから「野蛮」であるという勝手なイメージがついてしまったのだ。その中で自然と、「差別」が際立っていったようだ。私の心はズキズキと痛んだ。アイヌの人たちはつらかったろうに。実際今でも、アイヌの人は

「アイヌはどいつだ？」

と、からかわれたり、いじめにあったり、特徴的な顔つきのため、仕事をしたくても雇ってもらえない場合もあるそうだ。だが一番悲惨なのは、強制的に日本人化されたにもかかわらず、日本人と自分たちが区別されるということだ。また、この法律は平成9年まで続いてしまったために、アイヌ文化のほとんどが失われてしまったそうだ。文化というものは一生なくしてはならない、その民族(国)の象徴ともいえる大切な宝だというのに。

政府は1997年によくアイヌを先住として認め、伝統文化を保護、普及していくことを目的に「アイヌ文化振興法」を制定した。これは、アイヌ民族への差別の撤廃と、少しでも残されているアイヌ文化を守り、また、アイヌ民族はアイヌとしての自我意識の確立、などを定めた法律だ。残されたアイヌ文化を、アイヌ民族だけでなく、日本人、世界中の人に大切にしてもらえたなら、アイヌ文化復興に大きく前進できると思う。

また、2007年には、国際連合による、「先住民族の権利宣言」を受けて、2008年には「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」が国会で採択されたのだ。私は、アイヌ民族に対する見方が少しずつ変化してきていることに少しだけホッとした。

前にも書いた通り、アイヌ民族への差別は今だ消えていない。けれど、自分がアイヌ民族だということを隠さずに行っている人もいるそう。それは、アイヌ民族のことはもちろん、自分がアイヌ民族だということに対して、誇りを持っているのだと、私は思う。私も、日本という国はもちろん、自分が日本人であることに誇りを持っている。ただ、他の民族や国の文化、特徴について、すぐに納得する部分もあれば、そうでない部分も出てくることがある。それは当然のことだと思う。なぜなら、この地球はたくさんの命が、たくさんの場所で誕生し、成長して初めて他の場所を知るのだから。考え方は十人十色だ。

でも、それを頭ごなしに否定し、差別することは少し違うのではないかと思う。お互いのことをお互いに尊重するから、絆が生まれる。それができないようでは、私たちは前に進めないと思う。だが、私たち子供は、将来この地球を背負って、一步一步前に進むことが本当の役割だと考える。だから私は、差別など後退させるような事をする人に聞きたい。

「あなたは、その人の顔つきやその人の出生地だけで、その人の何が解るのですか。」と。